

## 創刊特別寄稿

## 私と心理学教室寸描

森 武夫



現職：専修大学名誉教授

1975年 法学部入職，2000年 同退職

専門領域：犯罪心理学

魚のぼら，すずき，ぶりなどは成長するに従って名前を変えるので出世魚といわれる。ぶりは，東京では，わかし→いなだ→わらさ→ぶりとなる。

心理学科も文学部人文学科心理学コース→文学部心理学科（この間に文学研究科修士課程→後期博士課程ができた）→人間科学部心理学科と出世コースを辿っている。そして面積も設備もスタッフも充実してきた。こんな素晴らしい環境で学習，研究できるようになったことを心からお喜び申し上げます。

私は小学校上級から旧制中学では天文学に夢中だった。恒星社厚生閣の『日本アマチュア天文史』には、「森武夫はこの年小惑星 Ceres の特別摂動と全年の予報を行った。…まだ中学3年生という若さで早々と摂動計算を手掛けたのである」などとあり，旧制高校の理科に入ったまでは順調だった。しかし大学の理学部（理I）に入れず，文転して心理学を学ぶため，当時の文Ⅱに入り，心理学科に進学した。学部では非常勤講師の宮城音弥先生の異常心理学（現在の臨床心理学）の講義に触発されて人間の研究をすることに決めた。卒論は当時ニュールック心理学などと言われていたものに焦点を当て，東京工大の宮城研究室をお借りして実験し，『域下刺激に対する弁別反応について』を書いた。

戦後のことで就職は困難で，卒後は試験を受けて家庭裁判所調査官になった。この時の東京試験場があとで考えると神田の専修大学旧校舎であった。家庭裁判所時代には，法務省，科学警察研究所，大学などの先輩のもとで，日本犯罪心理学会を設立のお手伝いをした。東京家庭裁判所では科学調査室に属し，在宅少年の心理テストをしたり，新しいテストを作ったりした。下着泥棒や，風呂場のぞき，すれ違いざまに女性を針で刺すなど，窃盗とか，住居侵入とか，傷害など罪名からは性犯罪であることが明らかでない性嗜好障害的な非行の少年のロールシャッハをとってみると，船，壺，川，滝，ほら穴などフロイトのいう象徴反応が多くでることに気づき学会で発表した。地方裁判所からの依頼された成人被告人の情状鑑定なども手掛けた。また，東洋大学の非常勤講師もしていた。

専修大学には1975年に法学部の学生に犯罪心理学を教えるということで法学部に入職した。故東條正城先生と一緒に入職だった。大学は不思議なところで旧制高校や大学で教わった恩師方と同僚になった。当時は文学部は心理学コースの時代で，心理のスタッフは，重松毅先生，金城辰夫先生，高橋滯子先生，東條実験助手の伊藤博子さんだった。私の法学部での特殊講義「犯罪心理学」は，なぜか一年で消えたので，翌年から文学部で犯罪心理学と家族心理学を交互に講義することになり，また心理学コースのゼミも担当するようになった。

犯罪心理学や家族心理学は，文学部の3，4年次の全学生に開かれていた。その試験の答案が面白い。結構心理学的な答案は英文科の学生のもので，心理学は心理学的のものと，常識的なものもある。社会学は社会学的な回答になる。哲学は思弁的，国文科はあまり学問の特徴がない答案だったりした。

こうしてみると熱心に勉強してないように見える者も3年次以上になると専門が身につけてきていることがうかがえた。

私のゼミは臨床ということで希望者が多かった。初めは早い着順に採用していたため、女子学生が、小田急線の朝一番できて、暗い坂道を登って、まだ閉まっている門の外で待っていたり、朝暗いうちにタクシーで来て（タクシーの運転手さんに「お嬢さん、夜遊びしてはだめだよ」と云われたそうだ）、守衛さんが守衛室で待たせてくれたりのようなことがあって、その後抽選ということにした。この頃は私は臨床の太陽だった。

初期には5時限のあとに、正常な人のロールシャッハをとったことが少なかったので、対象群の資料が欲しかったこともあって、有志にロールシャッハを教えたりしていた。結構多くの学生が参加し、熱心に勉強してくれた。学生は5時限のあとだとお腹が空いているためか、food反応が多く出たりした。また二人の人間が口論している反応をした学生は、口やかましい母親がいたり、男女のペアを多く反応した女子学生はいつも男の学生と歩いていたり、巧みに私生活が顔を出していることに気づかされたりした。

1992年に大学院の修士課程ができたが、初年度は臨床コースの入学者全員を教え、修論の主査をしなければならなかった。時間を6時限日に設定し、遠くの人や職場の人でも単位が取れるようにした。その後段々臨床の先生が増えてきて、私は太陽から月になり、準惑星になってしまった。1994年の後期博士課程での一回生に博士を出して定年になった。